

リーダーシップと物質性

Leadership and Materiality

博士後期課程 経営学専攻 2013 年度入学

伊 藤 真 一

ITO Shinichi

【論文要旨】

This study aims to explore the role of materiality on leadership. The number of leadership studies from the perspective of social constructionism that conceive leadership as co-constructed reality and consider how leadership is constructed socially has been increasing. In those studies, the role of language has been focused on mainly using discourse analysis.

Recently, on the other hand, leadership studies that focus on not only the role of language but also the role of materiality have been increasing. These studies can be positioned in the social constructionism but they argue about material objects additionally. They consider leadership as a product of human and non-human and a socio-material practice. The role of materiality begins to be paid attention, however the number of studies is limited and direction of these studies have not been integrated yet.

Therefore, this study will review leadership studies that focus on materiality. Through the literature review, it will be clarified that those studies tries to reconsider ontology and epistemology of leadership somewhat differently from the existing social constructionists' leadership studies that mainly focus on the role of language. Finally, the direction for further research will be discussed.

【キーワード】 Leadership (リーダーシップ), Materiality (物質性), Social Constructionism (社会構成主義), Ontology (存在論), Epistemology (認識論)

序

近年、社会構成主義的な立場に立つリーダーシップ研究が増加している。これらの研究においては、人々の間の相互作用によってリーダーシップが社会的に構成されるプロセスが研究されてきている (Fairhurst & Cooren, 2010)。このような社会構成主義的リーダーシップ研究においては、特に人間どうしの言語的コミュニケーションに注目し、リーダーシップが構成されていくプロセスを明らかにする研究が多い。

しかしながら近年、既存の社会構成主義的研究に対して批判がみられるようになってきている。それらの批判の多くはこれまでの社会構成主義が言語に偏重し、物質的側面に関しては無関心であったことに対するものである (Conrad, 2004)。例えば Gergen (2004) は、人間は「(人間を) とりまくすべてのものから独立ではありえない」(Gergen, 2004: 48, 訳 73) と述べ、我々はあらゆる存在の中で相互作用をしており、その中には物的な存在も含まれることを示唆している。しかし、既存の社会構成主義的研究は、「社会的行為に影響する物質的構造や物質的制約に関して無関心」(Reed, 2000: 525) であったのである。

こうした批判を受けて近年、物質性に着目したリーダーシップ研究が散見されるようになってきている。物質性に着目したリーダーシップ研究は、その数は非常に限られているが、既存の社会構成主義的リーダーシップ研究とは異なる視点からリーダーシップを捉えなおそうとしているものである。したがって、これらの研究潮流はリーダーシップをより深く、多様な視点から理解する上で意義のあるものであると考えられる。しかし、これらの研究はまだ草創期といえる段階にあり、これらの研究を体系的にレビューし、これらの研究に共通する貢献点を明らかにし、今後の方向性を定めるような論文は未だ見られない。

そこで、本論文では物質性に着目したリーダーシップ研究のレビューを通して、それらの研究に徹底することを明らかにすることによって社会構成主義的リーダーシップ研究に対する意義を指摘する。結論としては、これらの研究潮流は物質性と関連させてリーダーシップを考えることによって、リーダーシップの存在論と認識論を問い直すものであることが明らかになる。この存在論と認識論は、既存の社会構成主義的リーダーシップ研究のそれとは異なるものである。そして、この違いが既存の社会構成主義的リーダーシップ研究が見落としてきた視点からリーダーシップを捉え直し、より深く多様な視点からリーダーシップを理解することにつながると考えられる。

この論文の最後では、既存の物質性に着目したリーダーシップ研究の限界点を指摘し、今後の方向性を示す。既存の物質性に着目したリーダーシップ研究においては、物質がリーダーシップに対してどのように影響を与えるかに関しては考察がなされてきたものの、リーダーシップを構成する人間や物質的なアクターどうしがどのように相互に影響力を行使するのか、また、影響力を相互に行使しあうことがどのようにリーダーシップを変化させるのかといった分析はまだ不十

分である。そして、このような点を分析、考察することによって、リーダーの実践をより理解できるようになるであろうことが物質性に着目するリーダーシップ研究の今後の発展の方向性として指摘される。

1 社会構成主義的リーダーシップ研究

本研究は物質性に着目したリーダーシップ研究に焦点を当てているが、後述する通り、これらの研究は社会構成主義的リーダーシップ研究の延長線上に位置づけられる。したがって、ここでは既存の社会構成主義的リーダーシップ研究においてこれまで中心的な位置を占めてきた研究関心や、研究方法論を確認する。そしてその後、物質性に着目したリーダーシップ研究をレビューし、それまでの社会構成主義的なリーダーシップ研究との比較を行う。

1. 1 社会構成主義の研究関心と研究方法論

社会構成主義は、当然のこととみなされている現実 (taken-for-granted reality), もしくは日常的な現実 (commonsense reality) が構成されるプロセスを解明する研究アプローチである (Hacking, 1999: 25, 訳 57)。また、既知となっている現実には、「現象が現実的なものであり、それらが特殊な性格をそなえたものである、ということの確証」(Berger & Luckmann, 1966: 1, 訳 1) として定義される知識によって支えられている。そのため、社会構成主義は知識がどのように社会的に承認されるのか、もしくはどのように社会的に構成されるのかを問うアプローチであるともいえる。社会構成主義の立場を特定するといえる唯一の特徴は存在しないが⁵、以下の4つの鍵になる諸仮定のうち、一つ以上の仮定持つアプローチを社会構成主義に分類することができる (Burr, 1995: 2, 訳 3)。すなわち、①自明の知識に対して批判的なスタンスをとり、②知識は歴史的小および文化的なものに依拠すると考え、③知識は社会過程、つまり人々の日常的相互作用を通じてつくりあげられるとみなし、④知識は我々の社会的行為を規定すると考える、という仮定である (Burr, 1995: 3-5, 訳 4-7)。つまり、社会構成主義では、現実が客観的に存在するという自明の知識を批判し、歴史、文化に依存しながら人間どうしの相互作用によって構築された現実が、人間の行為を規定すると考えるのである。

現実を構成する相互作用においては、言語と言語的コミュニケーションの重要性が特に強調されている。なぜなら、言語は人間の思考の基礎を形成するものであり、意味形成において非常に大きな役割を果たすため (Burr, 1995: 44, 訳 69)、言語を通じて我々の生活する世界や我々自身を理解することが可能であるためである (Gergen, 1994: 49-50, 訳 63)。そのため、言語とコミュニケーションの役割は特に重要視され、言語的コミュニケーションは社会的現実が構成される際の媒介物であると捉えられている (Fairhurst & Grant, 2010: 174)。

言語とコミュニケーションの役割を重視する社会構成主義では、分析手法としてディスコース分析が中心的に用いられている。ディスコース分析とは「言葉の形態や構造、コンテキストにお

ける言語使用や意味や解釈を含む、言語とシニフィアンの研究」(Putnam & Fairhurst, 2001: 79)として定義される。社会構成主義では、ディスコース分析によって、現実が人間どうしの言語的コミュニケーションを通じた相互作用によってどのように構成されるのかが研究されてきたのである。

1. 2 社会構成主義的リーダーシップ研究の研究関心と研究方法論

リーダーシップ研究においても上述の社会構成主義的アプローチを採用した研究が増加している(Fairhurst & Grant, 2010: 172)。伝統的なリーダーシップ研究では、研究対象としてはリーダー個人に着目し、リーダーシップをトップダウンのものとして捉えていた。したがって、そもそもリーダーシップがどのように構築され、影響力が生まれるかといったプロセスやフォロワーの存在や行動、そしてリーダーシップが発揮されるコンテキストはあくまでも二次的なものであった(Fairhurst & Uhl-Bien, 2012)。一方、社会構成主義的リーダーシップ研究においては、リーダーシップは共構築(co-constructed)的な現実であり、アクター間の相互作用のプロセスであり結果であるということが強調される(Fairhurst & Grant, 2010: 175)。これらの研究は、リーダーやフォロワーは関係的に存在するものと捉えるため、アクター間の相互作用を通してリーダーシップが社会的に構成されていく側面や、リーダーシップの社会的構成プロセスに研究関心がある。

社会構成主義的リーダーシップ研究の一例としては、暗黙のリーダーシップ理論(Implicit Leadership Theories)が挙げられる。この研究においてはフォロワーが持つ「優れたリーダーシップの発揮に必要な性格や能力に関する個人的な仮説」(Nye & Forsyth, 1991: 361)と定義される暗黙のリーダーシップ理論が、彼らのリーダーの行動と合致していると認知されたときにリーダーがリーダーシップを発揮していると評価されるということが明らかになっている。つまり、フォロワーの持つ個人的仮説によってリーダーシップは構成されるということが指摘されたのである。

社会構成主義的リーダーシップ研究の方法論としては、他の社会構成主義的研究同様、ディスコース分析が採用されている。上記の通り、社会構成主義的リーダーシップ研究は、リーダーシップを個人の資質や行動ではなく、人々の間の相互作用によって構成される現象として捉えている。Fairhurst & Uhl-Bien (2012)は、ディスコース分析を適切に用いることによりリーダーとフォロワーの間のコンテキストがどのように構築され、意味形成されるかが明らかになることを指摘している(Fairhurst & Uhl-Bien, 2012: 1047)。

ディスコース分析を用いた社会構成主義的リーダーシップ研究の例として、Koivunen (2007)の研究が挙げられる。Koivunen (2007)は、リーダーシップに関するディスコースが組織コンテキストや他のディスコースとの関係性、もしくは他のディスコースとの矛盾によって変化していくことをディスコース分析によって明らかにした。例えば、「リーダーシップはヒーロー的であ

るべきである」というディスコースは過去にその組織がヒーロー的なリーダーに牽引されてきたというコンテキストの中で生まれ、「リーダーシップは分散的であるべきである」という組織内にある他のディスコースとの間の矛盾によって生じる議論によって変化していく。そして、こうしたディスコースの変化はメンバー間のリーダーシップに関する日々の議論 (debate) によって引き起こされることを指摘した (Koivunen, 2007)。

このように、社会構成主義的アプローチを採用するリーダーシップ研究においてもアクターどうしの言語的コミュニケーションに中心的関心があるため、研究方法としてはディスコース分析が中心的に用いられている。

1. 3 物質性への転回

上記では、社会構成主義的リーダーシップ研究の研究関心と研究方法論を確認してきた。しかしながら、近年こういった言語や言語的コミュニケーションに中心的関心を置く社会構成主義的研究に対して批判がみられるようになってきている。それらの批判の多くは、社会構成主義が人間の言語的コミュニケーション以外の要素に対して無関心であったことに対するものである (e.g. Reed, 2000; Conrad, 2004)。

Gergen (1999) によると、社会構成主義はアクターどうしの関係性に着目しながら、どのように社会的現実が構成されていくのかを考察するものであり、必ずしも人間どうしの関係性のみに焦点を当てて分析するものではない。人間は人間をとりまくすべてのものから独立には存在しない (Gergen, 1999: 48, 訳 73) ため、人間を取り巻くあらゆるものとの関係性の中で社会的現実がどのように構成されていくのかを研究していくことが本来の社会構成主義の研究関心であると考えられる。しかしながら、実際には人間どうしの言語的コミュニケーションと言語に焦点が当たっており、物質的なアクターとの関係性は十分に考察されてきたとは言い難い。例えば、上記のように、これまでの社会構成主義的リーダーシップ研究においてはリーダーシップが社会的に構成されるプロセスが研究されてきたが、その中ではディスコース分析を用いながら言語や言語的コミュニケーションを通してリーダーシップがいかに構成されるのかが研究されてきた。

このようなディスコース分析や言語の役割に関心が偏重してきたことに対して、批判が挙げられているのである。これらの批判の共通点は物質的現実に対する感覚の欠如に対する批判である (Conrad, 2004: 428)。例えば、Reed (2000) は、極端な社会構成主義者は、すべての現実と言語によって構築され、言語の外には何も存在しないと考え、「社会的行為に影響する物質的構造や物質的制約に関して無関心」 (Reed, 2000: 525) であると指摘している。また、Orlikowski (2007) はこれまでの組織研究において物質性は、無視され、自明視されるかもしくは特殊事例として扱われてきており、技術に関しては研究されているが、技術それ自体、もしくは技術使用の初期段階における組織への影響のどちらかのみが研究されてきたことを指摘した (Orlikowski, 2007: 1436-1437)。その上で、組織の中の日々の実践は社会—物質的なものであり、相互作用は人間ど

うしの間のみでなく、人間と物質的なものとの間にも相互作用が存在するため、物質性にも研究関心を向けるべきであると主張した (Orlikowski, 2007: 1444)。

このような背景から近年、社会構成主義的リーダーシップ研究においても、言語のみではなく、物質性に目を向けることでリーダーシップを捉え直そうという流れが起こり始めている (Pullen & Vachhani, 2013: 315)。これらの研究においては、リーダーシップが社会的に構成されるプロセスにおける身体、空間、技術など物質性を伴うアクターの役割が指摘されてきている (e.g. Sinclair, 2005; Bjørkeng et al., 2009; Ropo, et al., 2013, Fairhurst & Cooren, 2009, Mulcahy & Perillo, 2011)。

物質性に着目する必要性は次の2点から生じる。一点目は、人間どうしの相互作用は社会的環境のみでなく、物的な環境中でも行なわれる点である。例えば、喫茶店で会話するのとオフィスで会話するのとでは、または、直接対面で行なうのと、電話という物質を媒介するのとではその内容や理解に違いが生じることからもわかるように、人間どうしが会話をする際の物質的要因は人間どうしの相互作用に影響をもたらすことが考えられる。二点目は、相互作用は人間と人間の間のみでなく、人間と物的なものの間、もしくは物と物の間にも生じる点である。例えば、人間は携帯電話を使用するが、携帯電話も充電不足のアラートを表示することによって、人間をコンセントのそばまで動かし、携帯電話とコンセントを接続させる。こういった卑近な例からもわかるように、人間の行為や相互作用は物的なアクターと独立には起こりえないのである。

こういった点から、リーダーシップの社会的構成を考える際、言語以外の要素を考えることに一定の意義があると考えられる。なお、物質性に着目する研究も、言語の役割を否定しているわけではない。事実、それらの研究の中には、言語にも重要な役割があることを認めているものも存在する。これらの研究はあくまで、言語以外のより広範な要素にも着目することによってリーダーシップへの理解をより深めようとしているのである。

2 物質性に着目したリーダーシップ研究

2.1 物質性の定義と物質性に着目したリーダーシップ研究の位置づけ

ここでは、物質性に着目したリーダーシップ研究をいくつかレビューする。レビューするに先立って、これらの研究の位置づけの確認や、関連する用語の定義づけを行なっておく必要があるだろう。ここでは、位置づけの確認と定義づけを行なった後に、物質性に着目するリーダーシップ研究のレビューに入ることにする。

まず、物質性に着目するリーダーシップ研究であるが、これらの研究は社会構成主義的なリーダーシップ研究の延長線上に位置づけられると考えられる。物質性に着目する研究においても、その前提として、リーダーシップを客観的なものではなく、社会的に構成されるものと捉えることを明示している研究もあり (e.g. Bjørkeng et al., 2009: 148; Ropo, et al., 2013: 378; Mulcahy & Perillo, 2011: 127), 社会構成主義的研究に位置づけられるということが言える。その上で、本論

文では、「既存の社会構成主義的リーダーシップ研究」という言葉を、主に言語や言語的コミュニケーションに焦点を当てた研究という意味合いで使用する。一方、「物質性に着目するリーダーシップ研究」という言葉を、社会構成主義的研究の延長線上に位置づけられるが、言語以外にも、物質性に着目した研究という意味で使用。つまり、両研究群ともに社会構成主義的リーダーシップ研究に位置づけられるが、前者を言語に関心を払う研究群、後者を言語のみでなく物質性にも関心を払う研究群というように便宜的に区別して議論する。

次に、本論文では、物質性を「実存をもつ性質や特性」と定義する。つまり、実際に視覚や触覚を通してその存在を認知できる特性のことを指す。したがって、道具、文章、肉体、場所などのように直接見たり触れたりする物は、物質性を持つものの例として挙げられる。

2. 2 物質性に着目したリーダーシップ研究

近年、物質性に着目したリーダーシップ研究が見られるようになってきている。その数は極めて限られているが、これらの研究はリーダーシップという現象を理解しようとする研究者や、よりよいリーダーシップを発揮したいと考える実務家にとって示唆があるものであると考えられる。そこで、ここでは、これらの研究がどのような研究関心を持ち、具体的にはどのような物質性に着目し、それによって何が明らかになったかなどに焦点を当てながらレビューしていく。なお、これらの研究は表 2-1 に一覧として示されている。そして 3. では、これらの研究に通底す

表 2-1 物質性に着目したリーダーシップ研究

研究者	着目する物質性	研究内容	発見事実、研究意義
Sinclair(2007)	リーダーの身体	リーダーの身体がリーダーシップに及ぼす影響の考察	言語以外の要素に着目することの重要性を指摘。
Bjorkeng et al. (2009)	物質的配置(事例においては、建設現場)	実践化(新しい行動パターンの形成)における物質性の役割	物質性の配置がリーダーの実践の変化に影響を及ぼすことを指摘。
Ropo et al. (2013)	場所と空間	場所や空間のリーダーシップの代替物や補助物としての役割	身体よりも広範な、リーダーを取り巻く物質性への言及。
Fairhurst & Cooren(2009)	人間、非-人間からなるハイブリッドなネットワーク	リーダーシップを可能にするハイブリッドなネットワークの役割	単独の人間アクターのみでなく、ネットワークを構成するあらゆるアクターに着目する必要があることを指摘。
Mulcahy & Perillo(2011)	あらゆる非-人間アクター	非-人間アクターの持つ政治性	非-人間は利害関係を明確化し、対立や協調関係をつくりだすことを指摘。

出典：筆者作成

¹ Bjorkeng et al. (2009) においては、リーダーの実践が社会的に構成されるとされている。

ることがらを指摘することを通して、物質性に着目するリーダーシップ研究の意義を確認し、さらに今後の研究の方向性を示したい。

2. 2. 1 リーダーの身体への着目

Sinclair (2005) はリーダーの物理的身体 (physical body) がリーダーシップに影響をもたらすことを指摘し、リーダーシップ研究における物質性に関する議論の可能性を示唆した。それまでの社会構成主義的リーダーシップ研究においては、リーダーシップにおける身体の役割に関する考察はほとんどされてこなかった (Sinclair, 2005: 402)。しかしながら、Sinclair (2005) は、背丈、容貌、姿勢、動作、声といった身体的要素はリーダーシップにおいて重要な要素であり、リーダーシップの成否に影響を及ぼすということをケーススタディによって指摘した。なお、機能主義的研究の初期的研究に位置づけられる資質論において、有能なリーダーに共通する資質として身体的特徴が議論されたことはある。しかし、Sinclair (2005) の研究において、身体は社会的コンテクストに埋め込まれており、身体の役割やリーダーシップへの影響はコンテクストに依存することを主張しているため、資質論の議論とは大きく異なる。

Sinclair (2005) はオーストラリア、ビクトリア州の警察組織において組織変革をもたらした女性のリーダーの事例を通して、リーダーシップにおいて身体も重要な役割を果たすことを指摘した。その人物は女性として初めてビクトリア州の警察長に就任した。彼女の身体的特徴としては、がっしりとした体格であるが、印象としては穏やかで母性があり、警察内外の「皆から好かれるおばさん」といったものであった。この彼女の身体的特徴は地域住民との関わり合いに影響し、その後の組織変革に大いに影響を及ぼした。

当時のビクトリア州においては、家庭内暴力やドラッグ使用などが問題となっていた。これらを解決するために、警察組織は地域住民と良好な関係を築き、地域住民のコミュニティと近づくことが求められていた。そして、その女性リーダーはその風貌と、開放的な振る舞いによって、地域住民と良好な関係を築くことに成功したのであった。このことが後の組織変革における彼女のリーダーシップに正統性を与え、地域住民に対してより親密的な警察組織へと変革させていたのであった。この事例においては、彼女が地域住民と良好な関係を築いたことがリーダーシップに重要な影響を与えたが、彼女が良好な関係を築くことができた重要な要因としては彼女の身体的特徴を含む風貌が、地域住民に親しみを覚えさせたためであることが挙げられる。このように、彼女の身体的特徴はこの警察組織の変革における彼女のリーダーシップに大きな影響をもたらした。

この研究において、身体とリーダーシップの関係性やメカニズムに関する理論的考察は必ずしも十分ではない。しかしながら、実際の事例において、彼女の身体という要素を抜きに彼女のリーダーシップや組織変革を説明することはできないということを明らかにした点や、身体的な要素も含めたリーダーシップ研究の必要性を指摘した点に Sinclair (2005) の貢献があると言えよう。また、言語や言語的コミュニケーション以外の点を分析対象に入れることの必要性を提示し、そ

の後の物質性に着目したリーダーシップ研究に影響を与えたという点でも重要な研究であると評価できる。一方、限界点としては、リーダーの身体的な要素の重要性は指摘したものの、そのほかのリーダーを取り巻く物質性には言及していない点が考えられる。

2. 2. 2 リーダーの実践と物質的配置

Bjorkeng et al. (2009) はリーダーの実践が形成されていくうえでの物質性の役割に注目した。彼らは、建築事業に関するアライアンスにおけるリーダーシップチーム (Alliance Leadership Team) をエスノメソドロジーを用いて分析し、リーダーの実践がどのように形成、変化されていくのかを記述した。ここでいう実践とは、活動や相互作用を通じて形成される新しい行動パターンのことを意味する。彼らはそういった特定の実践が日々の活動を通して形成、変化していくことを実践化 (becoming (a) practice; practicing) と呼び、そのプロセスにおける物質的配置の役割を説明した。

彼らの分析においては、物質的配置が実践化のプロセスに対して影響を及ぼすということが明らかになった。分析の対象となった建築アライアンスは官民のパートナーシップであり、5つの組織からなる。その中で、アライアンスリーダーシップチームは、それぞれの組織のリーダーから構成されるチームであり、アライアンスの継続やプロジェクトを通じた学習を促進するためのチームであった。Bjorkeng et al. (2009) は、このリーダーシップチームの会議をオフィス内の会議室から建設現場に移したことによって、彼らの実践に変化が起きたことを記述した。彼らは当初は、オフィスビル内の会議室において会議を行っていたが、プロジェクトの感覚や、建築がうまくいっているか否かを直接的に目で見えるために会議の場所を建築現場へと移したのであった。元来、建築プロジェクトの管理においては、契約、計画、予算、責任の分配が最も重要視されていて、当初、リーダーたちはこれらに関するディスカッションと意思決定を行うことが主であった。しかし、会議の場所が建築現場に移ったことによって、彼らのディスカッションや意思決定の内容も、具体的な下水処理システムなどといった、より現場に近い内容に変化していった。

このような実践の変化は、釘が打たれ、コンクリートの型枠が立てられ、穴が掘られ、コンクリートが注がれるといった作業が進行している実際の建築現場において起こったのである。そして、この変化は、釘、コンクリートの型枠、穴、機械といった物質的配置のなかで、これら物質の関係性が可視化されたことによって彼らの関心に変化していったために起こったと考えられる。物質的なものから人間が感じ取る感覚は必ずしもすべて言語化できるものではなく、実際の場所、空間から直接的に感じるものであり (Ropo, et al., 2013: 381), このような実践の変化には実際に現場において現場の感覚をリーダーたちが感じ取っていったことが大きな影響を及ぼしたと考えられる。

Bjorkeng et al. (2009) の研究の貢献点としては、リーダーの実践の形成という側面における物質的配置の役割を記述し、物質的配置がリーダーの行為を変化させたプロセスを記述したことが挙げられる。

2. 2. 3 空間、場所への注目

Ropo, et al. (2013) はリーダーシップにおける場所 (place) と空間 (space) に関する論考を行った。彼らは、リーダーシップの意味形成的な側面に着目し、意味形成的なリーダーシップにおける場所と空間の役割を論じた。彼らは、場所と空間を次のように区別した。つまり、場所は客観的で明確な測定尺度で測定可能なもの。空間は、主観的で、感情的なものであり、経験や、シンボリックなものによって現われるものとして区別した。そして、ある場所は同時に空間でありうることを指摘した。そのうえで、空間と場所は、「感覚、感情、記憶といった具現化された経験を通して人々を導く。また、これらの経験は人々の行為、解釈、判断の方向を形成し、方向付ける」(Ropo, et al., 2013: 381) と論じ、ときにリーダーシップの代わりやリーダーシップを補助する役割を果たすことを主張した。

ある場所を見た時に、我々は主観的な感覚を想起し、我々の行為、解釈、判断に影響を及ぼされる。例えば、木で作られた机と椅子が整列した教室の写真を見た時に、我々は小学生や中学生のころに受けた、教室の前に立つ教師の、静かに授業を聞くようにといった命令に従うといった感覚を呼び起こす。また、このことは、規律が重視される企業では椅子と机を均等にならべ、上司の席を部下たちの机と向い合せて配置することによって、上記の学校の教室の例と同様の感覚を引き起こし、部下の行為、解釈、判断を統制するといった事例にみられる。また反対に、クリエイティビティを重視する会社が、開放的なオフィスレイアウトにしたり、独創的なオフィスデザインにしたりすることによって、社員のディスカッションや、社員の創造性を高めているといったような企業経営の事例の中にもみられる。

このように場所や空間は、人々の感覚を呼び起こすことを通して、行為、解釈、判断に影響を与える。そして、このことがリーダーシップの代替的役割や補助的役割を果たすことを Ropo, et al. (2013) は指摘した。また、リーダーシップと物質性に関連する研究の将来の方向性に関しては、「単にリーダーの物質的な肉体にのみ注目するのではなく、社会的に構成された集合的努力としてのリーダーシップを強調するべきである」(Ropo, 2013: 390) と述べ、個人としてのリーダー単体のみでなく、リーダーシップを取り巻く多様な要素に着目する必要があることを論じた。

2. 2. 4 人間、非一人間のハイブリッドとしてのリーダーシップ

Fairhurst & Cooren (2009) は ANT (Actor-Network Theory: アクター・ネットワーク理論) を採用しつつ、既存のリーダーシップ研究が、リーダーシップを一人の人間の特性や行動に過度に単純化して帰属していることを批判しながら、人間、非一人間を含む様々なアクターに着目する必要があることを指摘した。

ANT は人間や人間以外の要素が相互作用しながら社会的現実を構成していくプロセスを記述する研究方法論である。ANT では、人間のみならず、技術、機械、生物、人工物、自然物などといった非一人間であっても基本的行為に参加するアクティブな実在物の全てをアクターと呼ぶ (Callon, 2004: 6, 訳 45)。そして、人間と非一人間との間に本質的な違いはなく、あらゆるア

クターによって社会的現実は構成されていくとされている。

Farihurst & Cooren (2009) は ANT のマクロ・アクト (macro-act) という概念を援用することによって、リーダーシップという行為を可能とするネットワークを解明できることを指摘した。例えば、Callon (2004) はある人間が日本の高速道路で車を運転するという行為を可能にするのは、その背後にある人間、非一人間アクターからなるネットワークであると述べた。「ある人間が日本の高速道路で車を運転するという行為を可能にするのは何か」を考えたとき、表面的にはそのドライバーが運転しようと決めた意思決定やドライバーの運転能力であると考えられるかもしれない。しかし ANT では、この行為を可能にするのはドライバー、車を製造する技術、ドライバーに運転することを認める法律、事故にあった際に賠償責任を引き受けてくれる保険会社などのあらゆるアクターが入り交じったネットワークであると考えられる (Callon, 2004: 6)。そして、ドライバーはこれらのネットワークを代表して、車を運転するという行為をする。こういった、ネットワークを代表して行われる行為を ANT ではマクロ・アクトと呼ぶ。

また、Farihurst & Cooren (2009) は IBM において当時社長であったトーマス・ワトソン・ジュニアと 22 歳の女性の守衛にまつわるエピソードを紹介した。当時の IBM ではセキュリティエリアに立ち入るためには、その人が立ち入りを許可されていること示すバッジを身につけることがセキュリティポリシーにより義務づけられていた。そして、この女性が守衛する部屋に入るためには緑のバッジを身につけていることが必要であった。ある日、彼女が守衛するドアに、トーマス・ワトソン・ジュニアが側近達とやってきた。しかし、その時トーマス・ワトソン・ジュニアは緑のバッジを身につけていなかった。彼女は、彼がトーマス・ワトソン・ジュニアであり、当然このセキュリティエリアへの立ち入りが許可されている人物であるということを知っていたが、彼の入室を許可しなかったのである (Fairhurst & Cooren, 2009: 473)。

このエピソードから、リーダーシップもネットワークを代表する行為、つまりマクロ・アクトであるということが理解できる。この女性の守衛は、守衛であるという地位、IBM や IBM のセキュリティポリシー、そして緑のバッジといったネットワークを代表することによって、リーダーシップを発揮し、トーマス・ワトソン・ジュニアに緑のバッジを取りに行かせることができた。このように、ネットワークを代表することにより、一人の守衛が社長にたいしてさえ、リーダーシップを発揮することが可能となるのである。一方で、この事例においてトーマス・ワトソン・ジュニアは、緑のバッジを持っていなかったというだけで、リーダーシップを発揮することはできず、守衛のフォロワーにならざるを得なかった。つまり、適切なネットワークが背後にない場合には、リーダーシップを発揮することはできないのである。

このように、Fairhurst & Cooren (2009) はマクロ・アクトという概念を援用することにより、一人の人間が発揮しているように見られてきたリーダーシップもその背後にはその行為を可能とする異種混交のネットワークが存在し、そのネットワークを代表してリーダーシップは発揮されるのであると指摘した。Fairhurst & Cooren (2009) の主張に従えば、リーダーシップは人間、

非一人間のどちらかによって発揮されるのではなく、その両方が入り交じったネットワークを代表するアクターによって発揮される。あるアクターがリーダーシップを発揮することが可能になるのは、その主体がネットワークを代表しているからである。つまり、ある主体の背後にあるネットワークなしにはその主体はリーダーシップを発揮することができないのである。したがって、Fairhurst & Cooren (2009) はリーダーシップを発揮する主体を人間と非一人間が入り交じったネットワークであると捉えているといえよう。

また、Mulcahy & Perillo (2011) も、ANTを用いながら教育現場のリーダーシップを分析した。彼らは人間の相互作用は物質的存在に媒介されており、それらの物質的存在は実践の生成に介入していることを指摘した。彼らは教育現場のマネジメントやリーダーの実践を分析することを通して、マネジメント行為は、リーダーやマネジャーの内在的な能力のみに依存するのではなく、人々と物質の複雑な相互作用の中で規定されていくことによって形成されていく側面があることを指摘した。

この研究においては、道具、文章、身体、空間、場所などといった物質は政治性を持ち、人々の行為を形成していくということが明らかになった。彼らの分析の中でも、経営計画の存在それ自体が、多様なアクターの利害の対立や結びつきをもたらし、当初意図していなかった変化を組織にもたらした。

このように、Fairhurst & Cooren (2009) や Mulcahy & Perillo (2011) の研究においては、身体、空間など特定の物質性に着目するのではなく、リーダーシップをとりまくあらゆるアクターに着目し、リーダーシップを分析している。そして、人間や非一人間といった様々なアクターからなるネットワークの中でのリーダーシップに関して考察したのである。

3 物質性に着目したリーダーシップ研究の示唆と貢献

ここまでで、物質性に着目したリーダーシップ研究をレビューしてきた。ここで、これらの研究が共通して示唆するものを指摘することを通して、既存の社会構成主義的リーダーシップ研究への貢献点を指摘したい。そしてその後、既存の物質性に着目したリーダーシップ研究の限界点を指摘し、これらの研究が今後さらなる発展を果たしていくうえで重要になると考えられることがらを考察することによって、今後の研究のための方向性を示唆したい。

3. 1 リーダーシップの存在論

言語のみでなく、物質性にも着目するこれらの研究は、リーダーシップの存在論を再考察する研究であるといえる。つまり、これらの研究は、「リーダーシップとは何か」を問い直す研究であると言える。

既存の社会構成主義的リーダーシップ研究と物質性に着目する研究は両方ともリーダーシップを社会的に構成されるものとして捉えている。しかしながら、これらの両研究においては、リー

ダーシップが何であるかということに関して異なった仮定を持つことがいえる。既存の社会構成主義的リーダーシップ研究においては、リーダーシップとは言語による意味付けであり、リーダーとフォロワーの言語的なコミュニケーションを通してリーダーシップが発揮され、フォロワーの間でリーダーシップが間主観的に構成されていくと捉えられていた。したがって、リーダーシップとは Shotter (1993) が主張するように「曖昧であったり、はっきりしない状況を言語的に明確化する」(Shotter, 1993: 149-150) ことであると考えられている。

一方で、物質性に着目したリーダーシップ研究においては、物質性を持つ、身体、空間、技術などのアクターがリーダーシップにおいて重要な役割を担っていることが指摘されてきた。これらの研究においては、リーダーシップはリーダー自身やリーダーが発する言語やフォロワーとの言語的コミュニケーションのみでなく、物質性がリーダーシップの発揮において重要な役割を果たすことが指摘されてきた。また、物質性を持つアクターを含むあらゆるアクターが存在してはじめてリーダーシップが発現するということが主張されてきた。つまり、これらの研究では、リーダーやフォロワーや人間どうしの言語的コミュニケーションのみに還元してリーダーシップを考えるのではなく、さまざまな物質的なアクターによって発現する集合的な現象や、人間や非人間を含む多様なアクターからなるネットワークとしてリーダーシップを捉えているといえるだろう。

3. 2 リーダーシップの認識論

物質性に着目するリーダーシップ研究は、前述の存在論と関連して、リーダーシップの認識論を捉え直す研究であるということも言える。つまり、リーダーシップを研究者が理解する際に、既存の社会構成主義的リーダーシップ研究とは異なる視点を提供するものであるということがいえる。

まず、既存の社会構成主義的リーダーシップ研究も物質性に着目したリーダーシップ研究も、リーダーの行動や発言のみを観察、考察するのではなく、アクター間の相互作用によってリーダーシップの社会的構成を考えるものであるといえる。この点においては、両研究の間には共通点が見られる一方で、相違点も見られる。

既存の社会構成主義的リーダーシップ研究においては、言語的コミュニケーションに着目しながら、フォロワーの認知や、リーダーとフォロワー間の相互作用に着目して研究が行われてきた。フォロワーの認知に着目する研究では、リーダーの実際のパーソナリティや能力、言動ではなく、フォロワーに認知されたパーソナリティや能力、言動がリーダーシップにおいて重要であるとされている (Meindl, 1995: 330-331)。したがって、フォロワーの認知に焦点を当てながら、リーダーシップがどのように構成されているかが研究されてきた。加えて、リーダーシップの構成プロセスにおける、リーダーとフォロワーやフォロワーどうしの間の言語的コミュニケーションに焦点が当たってきた (e.g. Shotter, 1993; Koivunen, 2007)。これらの研究の中では、1. でも説明した

とおり、ディスコース分析を用いて、特定のコンテキスト内での言語使用を分析することによってリーダーシップがどのように構成されるのかが研究されてきた。

一方で、物質性に着目するリーダーシップ研究は、リーダーシップを理解する際にフォロワー間の認知や言語的側面のみでなく、物質的アクターを含むより多様なアクターへの着目が重要であるということを示唆していると考えられる。本来、社会構成主義的リーダーシップ研究において、リーダーシップとは、関連するアクター間の複雑な相互作用を通じた集合的な意味形成の結果であり、共一構成的 (co-constructed) なもの (Fairhurst & Cooren, 2010: 172) であるとされている。加えて、Gergen (1999) が人間は人間を取り巻くすべてのものとは独立に存在しえないと指摘していることからわかるように、リーダーシップに関連する様々アクターの相互作用を観察、考察することによってリーダーシップをより深く理解しようとするのが社会構成主義の本来の研究関心であったと考えられる。しかしながら、既存の社会構成主義的リーダーシップ研究においては、フォロワー間の認知や、言語的側面に関心が限定されてきた。

物質性に着目した研究は人間を取りまくあらゆるアクターとの相互作用を観察、考察しながらリーダーシップが社会的に構成されるプロセスを明らかにしていく研究であるといえる。これらの研究は身体、空間、文章などの人間以外のあらゆる物質的アクターにも注意を向け、物質的アクターがどのようにリーダーシップに影響を与え、リーダーシップを構成しているのかを明らかにする研究なのである。したがって、研究者がリーダーシップを考察する際に考慮するアクターを、人間や人間どうしの言語的コミュニケーションよりも広い範囲に設定する必要があるということがいえよう。

3. 3 今後の研究の方向性

ここまでで、物質性に着目したリーダーシップ研究のレビューを通して、これらの研究がリーダーシップを存在論的、認識論的に捉え直す研究であることを指摘してきた。今後の発展としては、リーダーシップをより集合的な現象として捉えながら、リーダーの実践を記述していくアプローチを採用することがより有効であると考えられる。物質性に着目した研究のうち、比較的初期のものはリーダーの身体、いったような特定の要素に着目した研究が主であった (e.g. Sinclair, 2005)。その研究においては、リーダーの身体といった特定の要素がリーダーシップにどのように影響を与え、リーダーシップをどのように構成しているのかが指摘されてきた。このような研究の中では、リーダーシップは一人の人間によって発揮される影響力であるといったように、伝統的なリーダーシップ理論と同様の措定がなされている。しかし、より最近では、特定の物質的な要素に着目するだけでなく、あらゆるアクターによって構成された集合的な現象としてリーダーシップを捉えるようになってきていることがレビューを通して明らかになった。

リーダーシップを人間や物質的なアクターからなる集合的な現象と捉えることによって、そのリーダーシップを可能としたのは何か、もしくは、どうしてそのようなリーダーシップを発揮し

たのかといったことが説明できるようになるだろう。一見、単独のアクターがリーダーシップを発揮しているように見えても、その背後にはリーダーシップを発揮することを可能とするネットワークが存在することを Fairhurst & Cooren (2009) は指摘した。どのようなネットワークが背後にあったのかを分析することによって、ネットワークを代表するアクターがどうしてそのようなリーダーシップを発揮したのかといったことが明らかになるだろう。

また、リーダーシップの背後にあるネットワークがどのように形成され、変化しているのかを明らかにすることも今後の研究の方向性の一つとして考えられる。これまでの物質性に着目したリーダーシップ研究においては、物質性がリーダーシップにどのように影響を与えるかといった側面を明らかにするための研究が多かった。例えば、Fairhurst & Cooren (2009) の研究においては、リーダーシップは人間、非一人間のハイブリッドなネットワークを代表して行なう行為であるということが指摘された。

しかし、こういった研究において、リーダーシップの背後に存在するネットワークが形成され、変化していくプロセスに関する議論は十分になされていない。ネットワーク形成において、どのようなアクターがどのような影響を行使したのか、ネットワークを代表するアクターは、どのようにしてネットワークを代表することが可能になったのかといった考察や、アクターの影響力の変化や新たなアクターの登場によってどのようにネットワークやリーダーシップが変化したのかといった考察が今後必要になるだろう。このような研究は、リーダーシップ現象を解明することに繋がると共に、実務家に対しても有益なインプリケーションを提示することを可能とすることが考えられる。

結

本論文では、物質性に着目したリーダーシップ研究のレビューを通して、これらの研究の貢献点を明らかにすることや今後の研究の方向性を示すことを目的としてきた。既存の社会構成主義的リーダーシップ研究においては、リーダーシップが社会的に構成されるうえでの、人間どうしの言語的コミュニケーションに中心的な関心が当たってきていた。その一方で、人間を取り巻き、人間どうしのコミュニケーションに対して影響をもたらしうる物質性に関してはこれまで十分な考察がなされてこなかった。物質性に着目するリーダーシップ研究はこうした物質的なアクターの中での人間の相互作用や、人間と物質の相互作用に着目しながらリーダーシップが社会—物質的に構成されていくプロセスを明らかにする研究であると言える。

物質性に着目するリーダーシップ研究の初期的研究は、リーダーの身体といった単一の物質的側面のみに着目する物が多かった (e.g. Sinclair, 2005)。しかし、その後の研究においては、Fairhurst & Cooren (2009) や、Mulcahy & Perillo (2011) の研究のように、より広範な物質的アクターに焦点を当て、リーダーシップを理解しようとする研究が展開されてきた。

そして、これらの研究に共通するのは、物質性とリーダーシップの関係性を考察することに

よって、リーダーシップの存在論と認識論を問い直そうとする試みであるということであった。存在論に関しては、既存の社会構成主義的リーダーシップ研究においては、リーダーシップは一人の人間の社会的に構成されたパーソナリティや言動に過度に単純化して帰属してきた(Fairhurst & Cooren, 2009: 478)。一方で、物質性に着目するリーダーシップ研究では、リーダーシップは人間のパーソナリティや言動以外の物質的な要素もリーダーシップを構成する要素であると主張してきた。特に、Fairhurst & Cooren (2009) や、Mulcahy & Perillo (2011) は、リーダーシップを人間、非一人間の両方からなるネットワークを代表する行為であり、こういったネットワークなしにはリーダーシップを説明することが難しいということを指摘しながら、リーダーシップがあらゆるアクターからなる集合的な現象であると捉えた。

また、認識論に関しては、既存の社会構成主義的リーダーシップ研究も、物質性に着目したリーダーシップ研究も、リーダーの行動や発言のみを観察、考察するのではなく、アクター間の相互作用によってリーダーシップの社会的構成を明らかにしていくという点に関しては共通するものの、両研究の間には異なる点も存在することが指摘された。既存の社会構成主義的リーダーシップ研究では、リーダーシップが構成されるプロセスを解明するにあたって、フォロワーの認知やリーダーとフォロワー間の相互作用に着目してきた。そして、これらの研究では、リーダーとフォロワー間や、フォロワーどうしの間の言語的コミュニケーションがディスコース分析によって研究されてきた。一方で、物質性に着目するリーダーシップ研究は、身体、空間、文章などの人間以外のあらゆる物質的アクターにも注意を向け、これらがどのようにリーダーシップに影響を与え、リーダーシップを構成しているのかを明らかにする研究であるということが明らかになった。

物質性に着目するリーダーシップ研究は未だ草創期にあり、その研究の数は決して多くない。しかし、研究の数は少ないとはいえ、これらの研究はリーダーシップの存在論と認識論を問い直すものであり、既存の社会構成主義的リーダーシップ研究に対して大いに示唆のあるものである。また、本論文では、今後の研究の方向性として、リーダーシップの背後にあるネットワークの形成や変化のプロセスに関する分析をすることによって、リーダーの実践をより理解できるようになるであろうことが指摘された。本研究が今後、物質性にも着目したリーダーシップ研究をより発展させることを期待することとしたい。

【参考文献】

- Berger, P. L. & Luckmann, T. (1966), *The Social Construction of Reality -A Treatise in the Sociology of Knowledge-*, Doubleday & Company. (山口節郎訳『現実の社会的構成：知識社会学論考』, 新曜社, 1977 年)
- Bjorkeng, K., Clegg, S. & Pitsis, T. (2009), "Becoming (a) Practice", *Management Learning*, No. 40, Vol. 2, pp. 145-159.
- Burr, V. (1995), *An Introduction to Social Constructionism*, Routledge. (田中一彦訳『社会構築主義への招待一言説分析とは何か』, 川島書店, 1997 年)
- Callon M. (2004), "The Role of Hybrid Communities and Socio-technical Arrangements in the Participatory Design", *Journal of the Center for Information Studies*, Vol. 5, pp. 3-10.

- Conrad, C. (2004), "Organizational Discourse Analysis: Avoiding the Determinism- Voluntarism Trap", *Organization*, Vol. 11, No. 3, pp. 427-439.
- Fairhurst, G. T. & Cooren, F. (2009), "Leadership and the Hybrid Production of Presence(s)", *Leadership*, Vol. 5, No. 4, pp. 469-490.
- Fairhurst, G. T. & Grant, D. (2010), "The Social Construction of Leadership: A Sailing Guide", *Management Communication Quarterly*, Vol. 24, No. 2, pp.171-210.
- Fairhurst, G. T., & Uhl-Bien, M. (2012), "Organizational Discourse Analysis (ODA): Examining Leadership as a Relational Process", *The Leadership Quarterly*, Vol. 23, pp.1043-1062.
- Gergen, K. J. (1994), *Realities and Relationships: Soundings in Social Constructionism*. Cambridge, Harvard University Press. (永田素彦, 深尾誠訳『社会構成主義の理論と実践—関係性が現実をつくる—』, ナカニシヤ出版, 2004 年)
- Gergen, K. J. (1999), *An Invitation to Social Constructionism*. Cambridge, Sage Publications of London. (東村知子訳『あなたへの社会構成主義』, ナカニシヤ出版, 2004 年)
- Hacking, I. (1999), *The Social Construction of What?*, Harvard University Press. (出口康夫, 久米暁訳『何が社会的に構成されるのか』, 岩波書店, 2006 年)
- Koivunen, N. (2007), "The processual nature of leadership discourses", *Scandinavian journal of management*, Vol. 23, No. 3, pp. 285-305.
- Meindl, J. R. (1995), "The Romance of Leadership as a Follower-Centric Theory: A Social Constructionist Approach", *The Leadership Quarterly*, Vol.6, No.3, pp.329-341.
- Mulcahy, D. & Perillo, S. (2011), "Thinking Management and Leadership within Colleges and Schools Somewhat Differently: A Practice-based, Actor-Network Theory Perspective", *Educational Management Administration & Leadership*, Vol. 39, No. 1, pp. 122-145.
- Nye, J. L. & Forsyth, D. R. (1991), "The Effects of Prototype-Based Biases on Leadership Appraisals: A Test of Leadership Categorization Theory", *Small Group Research*, Vol.22, No.3, pp.360-379.
- Orlikowski, W. J. (2007), "Sociomaterial Practices: Exploring Technology at Work", *Organization Studies*, Vol. 28, No. 9, pp. 1435-1448.
- Pullen, A. & Vachhani, S. (2013), "The Materiality of Leadership", *Leadership*, Vol. 9, No. 3, pp. 315-319.
- Putnam, L. L. & Fairhurst, G. T. (2001), "Discourse Analysis in Organizations: Issue and Concerns", In Jablin, F. M. & Putnam, L. (eds.), *The New Handbook of Organizational Communication: Advances in Theory, Research and Methodology*, Sage, pp.78-136.
- Reed, M. (2000), "The Limits of Discourse Analysis in Organizational Analysis", *Organization*, Vol. 7, No. 3, pp.524-530.
- Ropo, A., Sauer, E. & Salovaara, P. (2013), "Embodiment of Leadership Through Material Place", *Leadership*, Vol. 9, No. 3, pp. 378-395.
- Shotter, J. (1993), *Conversational realities: Constructing life through language*. London: Sage.
- Sinclair, A. (2005), "Body Possibilities in Leadership", *Leadership*, Vol. 1, No. 4, pp. 387-406.